

鬼師の世界—白地：(株)石英—
The World of Ogre-tile Makers — “Shiraji” as Non-Fired Tiles: Ishiei Inc. —

高原 隆

Takashi Takahara

愛知大学国際コミュニケーション学部

Faculty of International Communication, Aichi University

E-mail: Takashi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

People call those who make Onigawara (ogre-tiles) “Onitashi” or “Onishi” in Sanshu. Those people’s job is called Black Oniitaya which fires ogre-tiles in a kiln and the other White Oniitaya which does not fire them. Since 1998 I have been studying the field of Oniitaya in Sanshu, I have found five different patterns of which Oniitayas are formed. However I found a completely different pattern of the formation of Oniitaya when I studied Ishiei Inc. in Takahama.

I discuss how Ishiei is different from the other types of the formation of Oniitaya. It is in fact a new pattern which I have never seen before for a long time. The basic pattern as a formation of Oniitaya is the founder of Oniitaya is from the world of Oniitaya. I have never seen any exceptions which a person who had a different job from Oniitaya. The founder of Ishiei was Hideo Ishikawa whose job was not Oniitaya but a roof-tile maker. What he did was that on the one hand he had been a roof-tile maker, on the other he had been learning how to make ogre-tiles. Furthermore other factors also influenced this change: They were the changes of the times, those of social environments, those of the legal system and so on.

『鬼師の世界』では、窯で鬼瓦を焼くか焼かないか、つまり焼成前と焼成後によって製作中の鬼瓦の呼び名が変わる。焼成前の段階にある鬼瓦を白地といい、焼成後の鬼瓦を黒地と一般に呼ぶ。黒地の鬼板屋についてはほぼ調査は終えている。残る白地の鬼板屋を現在、一軒ずつ調べているところである。この白地の鬼板屋は実は二つのグループに大きく分けられている。一つが、伝統的な手作りによる鬼瓦を製作する鬼板屋と、もう一つが近代化されたプレス機械を使い鬼瓦を製造する鬼板屋である。ただこの二つの仕分けはあくまで仮に一般化した場合の話であり、両者は現実には重なり合って、手作りもすればプレスもするという鬼板屋も実際には存在している。同じ事が黒地の鬼板屋にも言うことができ、伝統の保持発展と近代化の導入とのせめぎ合いが常に進行しているのが鬼板屋の現場であり現状でもある。

今回は(株)石英を取り上げることにした。石英は鬼瓦組合という視点から見ると白地の鬼板屋といえる。事実、(株)石英は三州鬼瓦白地製造組合の組合員として登録さ

れている。ところが、そのことはあくまで組合という組織としての話であり、現実には様々な顔を持つのが（株）石英の特徴である。この多面的、多角的な、独自の企業体として発展してきている石英の姿を可能な限り描写し、その特徴を考察してみたい。

石川与松

（株）石英の起こりは石川与松にたどり着く。与松は明治19年（1886）に生まれており、昭和35年（1960）に亡くなっている。与松は、しかし、鬼板屋ではなかった。「瓦屋の与松」と呼ばれており、黒瓦を作る瓦屋であった。また、代々に渡る瓦屋ではなく、元々は飲み薬屋をやって生計を立てていた。ところが高浜で明治時代になり瓦産業が急速に盛んになるのを見て、与松は仕事を薬屋から瓦屋へと変えたのである。残念ながらいつ頃瓦屋へ転向したのかはわかっていない。石英の現社長である石川定次は「石英」の始まりとしての与松について次のように話してくれた。

うちの先代が、もう、もっと前は、僕もね、それは知らないんですけど、薬屋だったという話ですがね。あの、その、漢方薬じゃないんですけど、飲み薬屋をやってて、そこから、うちのおじいさん、僕にとってのおじいさんですね、が出たというか、こちらへ。もう少し向こうに住んでたっていう話なんですけどね。

ひいばあさんから……「薬屋だった」って話は聞いたやんね。薬局やってたって話しなんです。元々は、あのー、新道というか、本町通りというんですかね……の方で、薬局をやってたというのはいかがだったんですけどね……。

その薬屋をやっていた与松が瓦屋へと職を変える様を定次は次のように語っている。いわば、現在の石英の大本に至る始原に関する話である。

おじいさんが……、薬局が……、何て言うんですかね……、小さな薬局……、すごく小さかったらしくて、町の行商みたいな……、あの……、置き薬じゃないですけど……。そんなような、ちょっとはつきりしないんですけど。そんなようなことをやって……。「これじゃいかん」ということで……、その、たまたま、その、まだ、明治、昭和なのか……、その境ぐらい。大正か、明治かの境ぐらいで、……黒の達磨窯を作られたというのは……。というようには、私も話を聞いておるんですけど……。

あの……、瓦屋の方が儲かる……という……、うん、置き薬やるなら、あの、本当

に自分とこに店持って、きちっとした薬局をやるならいいけど、「今のままじゃあかんで」というような……。と聞いたことが……。子供の時でしたから、あんまりはつきり覚えてないんですけど、そんなようなことを、ちょろっと聞いたことはあるんですけど……。



第1図 石川与松「瓦屋の与松」

このように物事の始原^{たん}譚は当の本人がすでに亡くなって、石英の場合は、本人与松を直接知っている二代目（英雄）も亡くなり、三代目（定次）にその話を聞いていることも手伝い、明確さや具体性に欠いているのは否定できない。しかし、それでも見えてくるものがある。それは与松が事実、瓦の世界に参入したことである。ただ与松はややバンクモノ的などころがあり、仕事は常には熱心ではなかったようである。そうした与松を支えたのが息子の英雄であった。英雄は与松が25歳頃の子供である。与松が薬屋から黒瓦に移った時点ははっきりしていないが、仮に与松が30代半ば頃の出来事だとすると、英雄は十分に父与松の新しい仕事をかなり早い時期から手伝ったのではないかと考えられる。伝聞ではあるが、定次は黒瓦時代の様子を具体的に語っている。（第1図参照）

まあ……黒瓦になって、まあ、うちのおじいさん（与松）は、おばあさん曰く、「遊び人だで、仕事はあんまりやらなかった」という風にもちょっと聞いておるんです

けど……。

ほのかわり、うちの親父（英雄）が逆に働き者で、あの、すごい、黒瓦も親父が早くからやっと思ったという話は聞いたですね。

で、戦争の時には、もう、立て掛けがあったという話だったもんで、黒の窯はあったんですよ、たぶん。あのー、そこに防空壕掘ってどうのこうのって、隠れとったという話もちよっと聞いたもんですから……。

だで、その時には、もはや、瓦屋になっておったんだなーと思って……。うん、あれですけど、なんか一枚一枚、荒地も表に干して、うん、すくまして、ほいで、叩いて、こう、木型の上で、こう、やっしたとか、やらんとかね。で、それをまた干して、で、夜が来ると仕舞って、という……。なんかその繰り返しをやったという話は聞いたことがあるんですけど……。

もう、私（定次）が入ってきたときは（1970）、ほとんどプレスでしたもんね。金型で瓦を抜いてたもんですから、まあ、その時代は全く見てないんですけど。そういう話だけは親父からちょっと、過去はこうだったという話は聞いてはいるんですけどね。

石川英雄

英雄の父、与松は「瓦屋の与松」と呼ばれていた。その瓦屋から鬼板屋へと移り、今の石英の礎を創り上げていったのは英雄である。文字通り「石英」という名称そのものがそのことを如実に示している。英雄は明治44年（1911）3月11日に生まれている。そして平成18年（2009）3月24日に亡くなっている。石英を初めて訪れたのは平成11年（1999）8月31日のことであり、当時英雄は健在で仕事場に出て働いていた。しかし、その頃は私自身がまだ鬼板師の研究調査に入って日が浅く、英雄とは立ち話を少しした程度で終わっている。再び石英を訪れた平成25年には英雄はすでにいなかったのである。結果、英雄とはほとんどすれ違いに終わってしまった。もし話をもっと深く英雄から聞いていればと考えると、後悔の念が今も残るケースである。それ故、英雄に関することは英雄の長男である定次からの話に依っている。

英雄はまず父の与松が始めた黒瓦を作ることから瓦の世界へ入っている。ところが与松は息子の英雄を黒の瓦屋で終わらせることを良しとせず、英雄が16歳の時に鬼板屋へ小僧として奉公に出すのである。この時、その時はまだ存在しない「石英」の未来へ

の種が蒔かれたといえる。昭和1ないし2年（1926または1927）頃のことであった。与松は薬屋から瓦屋へ転業したものの、遅かれ早かれ鬼板屋の存在に気づき、瓦屋として鬼板師に憧れたのではないかと思われる。しかし、与松自身はすでに歳がいており、小僧として始めるには難しく、自分の夢を息子の英雄に託したのである。英雄が小僧として出された先が鬼源という高浜では最も古いといわれた鬼板屋であった。昭和1、2年の頃は鬼源を仕切っていた親方は創業者である初代鬼源の神谷春義である。（高原2004）英雄が鬼源へ入ったのは、神谷春義が50歳前後の頃であり、鬼源の経営は軌道に乗り、勢いが仕事場に張り詰めていた頃である。定次はこの事に関しては次のように述べている。

与松ですけど、まあ、おじいさんが、あの、黒瓦を立ち上げて、まあ、要するに一代目ですね。立ち上げられて、その時に、うちの、まあ、あの、親父というか、お父さん、まあ、あの、16歳で鬼源さんだったかな、そこへ、鬼板師としての修業に、一応行きました。年季奉公ですね、昔ですから。

で、その、いっとる間、与松という私のおじいさんが黒瓦をずっとやって。今でいうと、達磨窯というか、粘土で、あの、土でぶっつけたような、こういう風になった達磨窯でスタートされたという風にうかがってはおるんですけど。

まあ、そうしてやっとするうちに、まあ、親父が年季奉公明けて帰ってきて……。あの、まあ、あの、おじいさんと一緒に、まあ、ようは瓦屋のお手伝いして、まあ、鬼板師の腕を持ちながら瓦屋で跡を継いじゃった……という形なんですけど……。はい。

ここで注意を引くのが、なぜ英雄はせつかく鬼源で小僧からたたき上げて鬼板師になりながら、鬼板師として職人になるか、独立して鬼板屋を起こさずに、再び「瓦屋の与松」を受け継いだのかである。定次はこの事に関しては何も語っていない。おそらく最も現実的な理由は、「瓦屋の与松」が、英雄が鬼源で修業している間に思いのほか利益を上げるようになり、業績が安定して伸びていったことが大きな要因ではなかったのかと考えられる。事実、英雄は後に瓦屋を拡張し、「瓦屋の与松」から「石英赤瓦」へと大きな転換を図っている。それは黒瓦の製造から赤瓦（塩焼き瓦）への切り替えを意味し、それは同時に規模の拡大であった。窯が八百枚から約12.5倍の一万枚が焼ける窯へと移ったのである。その頃高浜では塩焼き瓦が登場し、瓦屋としての生き残りをかけての最初の業種変更であった。実際に「瓦屋の与松」という黒瓦屋から「石英赤瓦」の

塩焼きの瓦屋に変わったのは昭和 37 年（1962）頃のことである。そのおよそ 2 年前の 1960 年に英雄の父、与松は亡くなっている。英雄は 51 歳にして自ら新しい事業へ挑戦したことになる。屋号「石英赤瓦」は英雄の意気込みを明確に示している。つまり「石英」は石川の「石」と英雄の「英」からなっており、石川英雄の赤瓦であることを意味している。ただこの切り替えの計画は与松がまだ存命中に英雄から切り出した話らしく、両者の間で実際のところ葛藤があったといわれている。

うちの親父も好奇心が強いんだかなんとか知らないですけど、まあ、その窯（与松が焼いていた達磨窯）、瓦で換算しますと八百枚くらいしか一窯で入らなかったんですよ。これをいきなり「一万枚入る窯を造りたい」と言い出しまして……。

で、ちょっとそこら辺で何か……。僕はまだ小さかったですから、まあ、後になって聞かされたことなんですけど。親父（英雄）とおじいさん（与松）との間で多少、「そんなもん、やってけない」とかどうのと、いろんな、こう……。があったらしいんですけどね……。どうもうちの親父が押し切ったと。……という形で、その、一万枚の塩焼き窯が始まったと。

黒瓦から赤瓦への切り替えは父（与松）と子（英雄）の世代間の葛藤を経て、父、与松の死を契機に事実上の世代交代という形として実現した。英雄にとっては父からの独立を意味する新事業への船出であった。かなりの決意と気負いがあったと思われる。このようにして、プレスの金型で瓦を抜いて一万枚の塩焼き窯で生産する石英赤瓦が始まった。当時の日本経済の急成長と相まって、経営は順調であった。

しかし、英雄の長女が名古屋鉄道三河線で、自転車に乗って電車とぶつかるという事故を起こし、名鉄を半日止めたことによって、多額の負債が英雄に突然生じたのである。定次は次のように言っている。

うちの一番上のお姉さんが、たまたま交通事故で、ちょっとひどい死ぬか生きるかっていう事故に……。もういろんな運営費用やら、もういろんな事で、仕事もほとんど、「ちょっと、石英さん危ないんじゃないか」というようなこともね、一時言われたらしいんですけど……。

当時、定次は幼稚園児でこの事について「記憶にはない」と言っている。しかし、石英の存亡をかけた忘れてはならない出来事として、姉たちからこの事件は語られてきている。

姉も自転車で、結果、名鉄電車とぶつかりまして、1年か2年ぐらいかな、もうほとんど起きることすらできない状態で、病院に入る形で。で、お袋は、その、付きっきりで行きっぱなしですから。仕事の方もそれこそ、だいぶ難儀したらしいんですけどね。

退院してきてリハビリして歩けるようになるまで、また相当な月日がかかったんですけど、その間、ほとんど親父が一人、借金は返さにゃいかんわ……。

電車関係ですから、いろんな、そこでね、半日も止めちゃったとか、いろんな事がありましたから。あの、そういう関係の諸々の何かあったって話は後で聞いたんですけど。もうそうだと、それこそ「石英さんは、まあ、たぶん、潰れるぞ」という話もね、出とったらしいんですよ。

で、僕、全く知らなくて、真ん中の姉がよくこういうことを冗談半分でも言いますけど、「まあ、うちの親父は、よう、がんばった」と。「ここ、乗り切ったで、大したものだ」と。

この事件それ自体は一般的には不幸な出来事といえる。ところが約半世紀たった現在の時点から振り返れば、凶が転じて吉になっている。「石英」の存亡の危機ともいえるこの出来事は、これを家族一丸となって対処し、乗り切ったことが一家の伝説となり、逆に「石英」の基礎をしっかりと固める出来事に昇華されるに至っている。

僕の、その、自分の記憶にないんですけど。そうやって姉たちから言われて……。だから「何とかせにゃいかん」という、その、高校時代にもそうやって、「ああ、俺は、まあ、絶対ここまで親父がやったんだから、跡取らにゃいかん」という気持ちも芽生えておったのも事実なんですよ。

「せっかくここまで一生懸命がんばってくれたのを俺の代で無くすわけにはいかん」と。ですから、屋号も自分の屋号を使うんじゃなくて、「親の屋号をそのまま引き継ごう」ということで、あの一、ま、名前も変えず、「石英」ですけどね。まあ、昔は「石英赤瓦」。赤瓦っていうのは付いていたんですけど、それだけは外しまして、ただの「石英」っていうことで、ま、それを使って。ま、どうしてもね、石英っていう親父が立ち上げたものですから。

英雄は石英赤瓦を経営していったが、若い頃、鬼源で仕込まれた鬼板師であることが忘れ切れていなかった。赤瓦を焼きながら、英雄は鬼瓦を作るようになっていくのである。石英赤瓦になって初めて鬼瓦の生産が始まった。「与松の瓦屋」から「石英赤瓦」への変換は一大事業ではあったが、同じ瓦屋という意味では同じ土俵内の出来事である。ところが、英雄が始めた鬼瓦作りは、規模からいうと赤瓦生産とは比べものにはならなかったかもしれないが、質的には大変革の始まりを意味していた。そして、それは英雄の父、与松がまさに夢見ていたことであった。瓦屋から鬼板屋への脱皮である。その様子を定次が語っている。

窯の大きさも、まあ、千枚入るか入らん窯から、約一万枚入る大きな窯に変えて、あの一、やりかけながら……。自分が、やっぱり鬼瓦というのに、どうしても、あの一、見切りがつけられなかったというか、あきらめられないということで……。

あの一、塩焼きになりますと、4日から5日に一度の火入れになりますので、1日「窯あい」というのができるんですね。その窯あいっていうのは、本当にもうやることがないんですよ。で、そこで、親父が、まあ、あの一、「鬼をもう一度やりたい」



第2図 石川英雄 (株)石英にて大黒様を製作中 1999年8月31日撮影

ということで、あの一、僕が小さかったんだけど、まあ、手作りの鬼を、また、そこで……始めて。

自分とこで作って焼いてっていうかたちまで全部……やり出して。塩焼きの瓦も焼きながら。プレスですね。手作りで抜くことも……。鬼をやりたい。(第2図参照)

英雄は石英赤瓦が始まったことをきっかけにして、英雄自身が本来やりたかったことをやるようになったのである。それがまさに石英における鬼作りの始まりであった。この鬼作りは後に加速されることになる。本来本業として始めた赤瓦が娘の電車事故をも乗り越えて軌道に乗り出した頃、運命的な出来事が起きる。石英赤瓦の経営を支えていた、いわゆる日本社会の高度経済成長は負の遺産をも同時にもたらしていた。公害の発生が日本の各地に発生し始めていたのである。国はその対策として昭和42年(1967)に公害対策基本法を制定している。さらに翌年には工場の煤煙、車の排気ガスを規制する大気汚染防止法を公布した。これを受けて瓦産業を抱える高浜は公害対策に乗り出すことになる。

「三州のスズメは黒い」と言われ、いぶし瓦を焼くだるま窯から黒煙が上がっていた高浜町(現高浜市)は69年、公害対策協議会を設置。翌年1月、業者に対する融資制度を設け、燃料を石炭から、煤の出ないガスへの切り替えを促していった。(読売新聞2013年3月8日)

どれほどの煙が高浜とその近郊から出ていたかは、「三州瓦700基超から煙」という見出しで、読売新聞の記事にその様子が描かれている。

昭和の初め、高浜市や碧南市、刈谷市などの西三河には700基を超えるだるま窯が、黒煙を吐いていた。「煤で前がかすみ、バスが時々、止まったこともあった。縁側を歩くと、足跡が付いた。煤が積もっていたからね」と高橋(秋人)が往時を振り返った。「三州のスズメは黒い」とも言われた。三州とは三河の古称で、三州瓦の産地はかつて、煙に包まれていた。(読売新聞2013年2月22日)

上記のように瓦の町高浜では実質的な公害対策が施行されたのは昭和45年(1970)1月からであった。これを境に瓦業界は石炭からガスへの燃料切り替えが行われ始めたのである。それと共に、高浜一帯から達磨窯のある光景が消えていったのである。

石英赤瓦も例外ではなかった。早急に対応を迫られる事態が発生したのである。その

年、昭和45年は奇しくも、石川英雄の長男、定次が高校を卒業して石英赤瓦に入った年であった。絶妙のタイミングと言わざるを得ない。定次は石英赤瓦に入るとともに、この問題に直面することになる。石英赤瓦の場合、単なる燃料の切り替えで終わらなかった。営業の根幹を大幅に軌道修正する事態に直面する。それが瓦屋から鬼板屋への業種の切り替えであった。定次は次のように当時を振り返る。

僕が21歳の時（昭和48年）だから、どれくらいになるのかあれですけど、えー、まあ、要するに石炭ですね。石炭が、焼べることが、その、要するに、もう汚染の関係上だめだという法律の規制が入ってきました。

ま、たまたまうちの親父（英雄）が先代のおじいさん（与松）が黒（黒瓦）やっていたときに、もう、あの、いろいろあったのかなんだかわからんですけど、鬼瓦の手作り職人という形で、あの、よそ（鬼源）へちょっと小僧に出たもんですから。

ま、その関係もあって、手作り関係はうちの親父に任せとけば何でもできるということ……。あの、もう塩焼きが、あと2年で、まあ、要するに、「石炭が焚けませんよ」という通知というかあれがあって。まあ、じゃあどうしよう。

じゃあ、塩焼きを、当時もう、重油という、まあ、A重油ですけど……。あ、重油で潜ればまだやれたんですけど……。でも、それやるには設備がかかるし、まあ、ぼちぼち、今は高浜でも、どこでもやっているとありますが、トンネル窯という一つの大きなそういう流れの方向転換のちょうど時期に差し掛かってまして……。もし、その設備をしても、たぶん、トンネルのそういう窯の、入れれば自動的に突き出されて出てくるというようなシステムのようなものには勝てないだろうということ……。

まあ、トンネル窯をやるには膨大な費用がかかる。じゃあ、親父が、「じゃあ、俺が手作りでずっとやって来たから、鬼瓦をやるか」という話になりまして……。

英雄と定次は塩焼き瓦の生産継続の可能性を石炭から重油への切り替えで対応しようと考えたが、設備の問題は生じ、さらに新たな問題であるトンネル窯の出現への対処にも迫られたのである。定次は塩焼き窯を断念した理由をほかにも述べている。

要は「石炭はもう一切焚いてはならん」という条例ですよ。ほれで、重油に、A

重油にその時は切り替えないと、あの、もう、塩焼きはやれないと。……ということ
とで……悩んだんですよ。親父と一緒に、あの、「どうしよう」って言ったけど
……。 「よそがやるのを見て、ちょっと休業しよう」って。

よその人がやるのを見て、塩焼きの色を見たら……。あの、赤く光る色から、茶色
く光る色に。やっぱり重油だと石炭と違って色が思うようにははじめの頃は出な
かったということで、「これ、苦勞しそうだよね」っていう話しから、「じゃ、やめ
ようか」という……。

このように石英赤瓦は当時の時代の流れであった塩焼き窯からトンネル窯への移行を
取らず、瓦屋から鬼屋になるという異色の選択をしたのである。この選択が可能になっ
た一番の理由はやはり石川与松にあるといえる。与松が息子の英雄を鬼源へ小僧として
出したというその一手が「瓦屋の与松」を現在の(株)石英へと導いたのである。

ちょうどね、あの、トンネルが増えてく時代で、塩焼きがなくなって……。トンネ
ル窯に皆さん移行されていかれる。で、うちは、たまたま、撤退したわけではない
んだけど……。一往、下がって、あの一、鬼屋になった。

石川定次

石英赤瓦から鬼板屋の石英へと大きく舵を切る重大な時期に定次は英雄の期待を一身
に背負って、昭和45年(1970)に高校を卒業するとすぐに石英赤瓦に入っている。定
次は昭和27年(1952)3月3日に生まれており、与松の黒瓦、そして英雄の赤瓦の時
代を見ながら成長している。実際に定次も石炭を窯に焼べたり、石炭を焚いた窯から出
るコークスを拾い出したりといった仕事を手伝っていた。

生まれた場所は今ここに現在いる自宅で、はい、生まれまして。まあ、小さい頃から、
あの、結果、家の商売をもう、ずっと見ながら育てて来ましたから。僕としては、
もう、その、小学、中学、高校出て、結果的には、もう、後を継ぐもんだという形で、
もう自分もそう思っていたし、それが必然的に当たり前という感覚で、もう、何も
考えずにこの世界へ飛び込んで来たんですけども……。

もう、見ているうちは簡単そうで、「あー、こんなの俺にもできるわ」と、実際そ
ういう安易な気持ちであったんですけども……。実際入って、こう時がたつにつ
れね、もう、だんだんだんだん、「いや、えらいことやっちゃったなあ」と……。 「難

しい世界に入ったなあ」という、その実感というのは、もう肌でひしひし感じてきました。

英雄は石英赤瓦に入ってきた定次に早速、鬼板師になるための特別教育を施す。それは英雄が与松から受けたことと同じ手法であり、それは取りも直さず定次をほかの鬼板屋へ小僧として出すことであった。定次は次のように語っている。

私も、18で、この……ていうか、一応、高校降りたときに、親父（英雄）はね……、何か先見の明があったのかは知らないですけど……、私を、あの、まあ、うちのせがれ（石川智昭）と一緒になんですけど、あの、「小僧に……出す」ってんで、いろんなとこにね……。

丸市っさんだとか、ほれこそ、鬼仙さん、鬼源さんだとか、いろんなとこに声かけて、「うちのせがれ、ちょっと仕込んでくれんか」という話を持って行ったんですよね。私も2回ぐらい一緒に付いてったんですけど……。みんな断られまして……。[英雄さんの息子は預かれん]と、うん。「あなたにすごい腕があるのに、仕込めれんかったら、うちがすごい恥をかく」と。だから、「あずかることはできない」と……。ことごとく断られまして、で、うちの親父が、「しょうがない、俺が教える」と言って、で、2年ぐらいやったんですけど……。

しかし、物事は思うようには運ばなかった。もし、定次が小僧としてほかの鬼板屋に入って年季奉公を努め上げていれば、英雄が当初思い描いていたように、定次は手作りの鬼板師になっていたかもしれない。ところが定次が石英赤瓦に残ったところ、暫くするとすぐに、その後を追うように、石英赤瓦自体が存続の危機に見舞われることになってしまう。定次はその渦中に投げ込まれることになる。その危機とは三州瓦産業全体を襲った国の公害対策規制の実施に伴う、高浜が取った石炭からガスへの燃料切り替え規制の施行にあった。この過程で英雄は瓦屋から鬼板屋になる道を選択する。それは当初、手作りの鬼板屋を意味していた。ところが手作りを修業し始めた息子の定次が、プレス機械による鬼瓦の生産の導入を提案するのである。

このまま、その、ただ手作りだけでやるなら、僕は、たぶん、将来的にあまりメリットがないじゃないかと……。ま、そういうことで、「プレスの機械を導入したらどうか」と……。で、手作りもやっていけばいい。そうすることで幅が広がるし、まだその当時、その世界（鬼瓦業界）が、プレスっていう、そんなに普及していま

せんでしたから……。

まあ、新参者（石英赤瓦）があとから割り込んでいくには、やっぱりゆとりがないと。ま、僕なりの判断をしまして、で、（英雄と）話し合いをして、「ちょっとお金がかかるけども、やろうじゃないか」と。

まあ、僕も 21 を過ぎたところでしたし、あの、自分がやる気になってやりゃ、絶対借金は返せる。長い、その、自分らの将来がいっぱいあるんだし、「やってける」ということで、親父を、まあ、説得じゃあないですけど、賛同してもらいまして、で、まあ、一応、プレスを増やしまして……。

英雄によって瓦屋の石英赤瓦を鬼板屋へ転業する決定に続き、石英赤瓦は息子の定次によってプレス機械の導入とそのプレス機械による鬼瓦の生産に取りかかったのである。この事は手作りによる伝統的な鬼板屋を石英鬼瓦は最終的には目指さなかったと言えることができる。石英赤瓦自体が一万枚規模のプレス機械による赤瓦の生産を昭和 37 年からすでに約 10 年間にわたって行っていたことが、鬼瓦のプレス機械導入に大きく影響を及ぼしているのは間違いない。プレス機械の現場をすでに知っていたことが大きい。さらに瓦の生産は塩焼き窯からトンネル窯へと当時移行しつつあった。その移行の可能性も石英赤瓦では実際に検討され、トンネル窯による瓦の市場規模の拡大を高い確率で予想できる立場にあった。

「このまま（手作りの鬼瓦製作のみ）だと、縮小してっちゃうぞ」……という話で……。ちょっと売る方にも力を入れないと……。ということで、結果、その、トンネル窯ができてくなかで、チャンスはここで捨っていかないと……。あの一、やっぱり伸びれへんということ……。。

「これなら（手作りの鬼）俺でもいけるかな」と思ったんですけどね。すごい安易な気持ちですけど。ただやってみたらとんでもない難しい。ということで、やっぱり、それも（手作り）手伝いながら少しはやったんですけどね。ですけど結果的にね、数はできない。いろんな面で、これだけでは僕はこの家を守って自信は無いなっていう、まあ、自分なりの判断を、まあ、その、今でいえば、若造の時ですけど、ま、勝手な判断ですけどね。

俺はもっと売り上げを伸ばすには大量生産しかない。もう手でこそそそやって、

これやとったって、何か人間が陰に籠もって行っちゃいそうだと。で、いざ一月たってみたらこんなことかと。これじゃあ、ちょっと寂しいものがあるなど。気持ちの中でね。

やっぱり、そのプレスもんという、大量に作れるというすごく魅力もありましたし。金は、まあ、どうしてもかかりますけど、でも、一回立ち上げちゃえば、これは償却できるなという気持ちはありましたね、心の中では。

こういったやりとりを定次は英雄と繰り返しながら、英雄が目指した手作りの鬼板屋からプレスを中心とする鬼板屋へと軌道を修正したのであった。

じゃ、「営業行けや」という話しで……。で、まあ、親父の顔のわかってるとこは、「俺もついてってやるわ」という話しから、ずっと回って、一緒にやって……。で、まあ、手作りが知らんどるうちに、おろそかになってしまったと。

親父も、物わがりのいい人だったというか、あの、僕がこうしたいということに対してね、反対はしなかったじゃんね。逆に、応援してくれたとか、「おい、手伝ったるで、やれ」ということで……。だから、手作りから、その、営業じゃないですけど、外回りに移るときも、べつに「ほんなん」とか、何とかとか、一言もなく、「おまえがそう思ったんなら、やれやええ」と……。 「手作りは俺がやったるで」と。



第3図 石川英雄と石川定次 (1999年8月31日撮影)

このようにして、石英赤瓦は英雄による手作りの鬼瓦と、定次によるプレス鬼の生産の両方をする白地の鬼板屋へと変貌し、再出発していったのである。さらにこの実質的な瓦屋から鬼板屋への移行を受けて翌年の昭和49年(1974)に社名を「石英赤瓦」から「石英工業」へと変更している。文字通り名は体を表すことになったのである。(第3図参照)

さて、国が制定した昭和42年(1967)の公害対策基準法に端を発する一連の各自治体における公害対策規制は、それまで培ってきた各地の伝統的な生活様式を一変させることになる。高浜も例外ではなかった。瓦屋や土管といった土ものの生産を主産業とする町で、一時は700基を超える達磨窯で町は黒煙に覆われながらも、賑わっていたところである。ところが、長い年月をかけて形成されてきた町のこの景観が、一連の法規制でもって、数年足らずのうちに消滅の道をたどったのである。高浜で当時の達磨窯が現存するのは田戸町にある高橋秋人のもの一基である。全国でも珍しい存在になっている。公害対策を取る必要があったとはいえ、別の意味からいうと、地域に根ざした伝統文化の一片の法による破壊でもあった。石英赤瓦の一連の変遷はその具体的な一例といえる。それが高浜を中心とした一帯の七百軒以上もの瓦や鬼瓦そして土管などの土もの生産者の間に起こったのである。高浜の町は一変したとあって差し支えない。ちょうど石英赤瓦が石英工業になったように。

石英赤瓦から手作りの鬼瓦とプレス機械による鬼瓦を生産する石英工業になったのは昭和49年のことであった。新しい白地の鬼板屋(白地屋)の誕生である。ところが、石川英雄は石英赤瓦の時代にすでにプレス機械による鬼瓦の製作に乗り出していた。つまり、塩焼きの瓦をプレス機械で抜き、塩焼き用の大きな達磨窯で焼きながら、鬼瓦を手作りで作り始めた英雄は、プレス機械による鬼瓦の製作をも始めたのである。一見、息子の定次主導のプレス機械による鬼瓦生産が石英工業になって始まったかのような流れに見えるが、始まりは石英赤瓦の中にすでにあったのだ。それもかなり早い時期から英雄はプレス機械による鬼瓦製作に取りかかっていた。まず石英赤瓦は昭和37年(1962)頃に生産を開始していることが一つである。そして同じ頃、プレス機械による鬼瓦生産を企てた会社があった。深谷産業である。中心人物は深谷定男と兼子武雄であった。昭和38年(1963)に設立されている。この二人のうち、実際に会うことができたのは兼子武雄であった。武雄は誰が最初にプレスを試みたかについてははっきりと述べている。

最初にプレスにね、しようかなて思ったのは、あのう、今でもやって見える石英さんて人の親父さん。あのう、石川英雄さんて人なんだけどね。その人が、あのう、(プ

レスを) したって話は聞いてますけどね。

うちらが(深谷産業)最初にプレスをやろうとして鍛冶屋さんへ行ったときに、その人が作った金型があったんですよ。その金型があって、その金型で最初にやりましたね。(高原 2012)

石英赤瓦が1962年に設立され、深谷産業が1963年に始まっている。そして、武雄はプレス機械の最初の金型は石英赤瓦の英雄が作った金型を使用したと言っているのだ。この事は英雄が石英赤瓦を起こして塩焼き瓦を生産し始めるとほぼ同時に手作りの鬼瓦を製作し始めたことを意味し、さらにプレス機械による鬼瓦の製作にも着手し、鬼瓦の金型作りを試みていたことがわかる。当時まだ鬼瓦のプレス機械は初期段階にあり、この事から察するに、英雄はかなり創建の明のある人であったといえよう。定次もこの件を裏付ける話をしている。

金型を、この、鬼瓦として作ったのが……、うちの親父が第一号でしたもんですから。はい。で、土練機で出すにしても、まあ、その当時、土練機ってものがなくて、まあ、玉土の真空が入らない土練機しかなかったんですね。……で、それで、プレスに荒地を入れてやったところが、ひつついてしまって、柔らかすぎて、どうしても抜けないと。

うん、ということで、一時ちょっと、断念はしとったんですけど、その時に、まあ、あの、小さい波もんの5又、6又の金型を作ったのが、うちが初めてで、その時に、深谷産業さんの、まあ、亡くなられた先代の方(深谷定男)が、うちの親父と知り合いなのか、まあ、そこら辺は……、知り合いだったという話は聞いておるんですけど。

あの一、真空土練機を深谷産業さんが一番始めに入れられたのかな……。うん、で、その関係で、あの、うちは金型を遊ばせてたもんですから、もう使ってなかったもんですから。「だめだ」ということで……。で、深谷さんが「譲ってくれ」ということで、うちの親父が譲ったという話は聞いておりますけど。

それから、真空土練機が普及して、まあ、うちも、親父がさっきの話ですけど、あの一、まだそんなに……。深谷さんがメインで、まあ、プレスかやり出されて、まあ、そのあとぐらいから、うちが、まあ、やり出したと……。

以上の話から察するに、英雄は石英赤瓦の時、それも石英赤瓦を立ち上げて間もない頃にすでに鬼瓦のプレス機械生産を試み始めていたことになり、この分野における先駆者の一人であったことがわかる。しかし、誰がプレス用鬼瓦の金型を最初に作ったかについては、実のところ不透明である。兼子武雄が次のように言っているからである。

最初のコ型かな……？ えっとね、その、深谷産業に五人（深谷定男、兼子武雄、石川武経、田島敬、加藤佐久次）いたときに、神仲さんにも金型があったでね。金型が違いました。ほいだで、私が、あのう、ちょっと間におらんようになって（神仲から独立したあと）からですね。その当時にプレスの地というのが動いたんじゃないかな。（高原 2012）

武雄が神仲から独立したのが昭和 33 年（1958）頃であり、深谷産業が始まったのが昭和 38 年である。そして石英赤瓦が昭和 37 年に立ち上がっている。現在のところ誰が最初にプレス用の鬼瓦のコ型を作ったかについては未定といえる。

石英工業は白地の手作りプレスと兼ねる鬼板屋として昭和 49 年（1974）に石英赤瓦から名義変更して始まっている。当初は白地の鬼板屋であった。ところが、石英赤瓦の時代は実際に一万枚の瓦を焼く大きな窯を持っていた。またそれ以前も、達磨窯で、黒瓦を焼く瓦屋であった。その瓦屋が鬼板屋へ業種を変えて起きた重要な変化の一つある。もともと窯をもって仕事をしていたが、窯を待たない鬼板屋になったことである。白地屋である。この事は英雄と定次に心理的な空隙を生むことになる。窯を持つ黒の鬼板屋は高浜では二代、三代と続く格式と実績のある伝統的な鬼板屋である。英雄は確かに鬼源で小僧として働き、年季奉公を経て鬼板師になった。しかし、本業は塩焼き瓦を生産する瓦屋であった。また英雄に続く定次は手作りの鬼板師ではなく、プレス機械の鬼板屋を始めたことにより、当時、新興の鬼板屋としてはいきなり窯を持つ黒の鬼板屋として出発できなかったのである。定次はその独特な白地屋の感覚を述べている。

プレスをやって白地ばっか造っとってもということ……。結果的に、「ちょっと焼いてみたいな」と思う部分も……。まあ、昔、その白地（瓦）を僕も 3 年ばか焼いてましたから、やっぱり焼きってということに関してはすごく魅力がある。

で、あくまで白地（鬼瓦）を造るってことに関しては、もう、そっから 10 年以上経過しましたから。まあ、ある程度。だったら、今度、焼く方も少し考えていかんやいかんじゃないかということで、僕もちょっと少し焼く方も考え出したんですけど

ね。

定次が言っていることは元々焼きを知っているものが抱く感覚である。定次は同様の感覚をもっと深めた言葉で語っている。

白地って造っていても、何かこう消化不良のような気がして……、自分自身。これをついでに屋根にたとえれば、その、買っていただけるものではない。どっかへ持ち込んで焼かなきゃいけない。焼いたものがどういう形で、どういう風の流れでいくかというのは僕らではさっぱり把握できない。「こういうもの、作ってくださいよ」、「はい、わかりました」、「作りました」、「じゃあ、もうできました」と。まあ、その繰り返しだけですから。

もう、僕らの業界の言葉で、半製品という言葉を使うんですけど、完全な製品じゃないんです。だから、さっきもちょっと出ましたけど、布袋さんを作っても、鍾馗さんを作っても、狸を作っても、あくまでそれは半製品であって、水をかければ溶けてしまうという状態で……。どうも自分自身の気持ちのなかに、こう、消化不良というか、何か、こう、「これじゃいかんじゃないか」という気持ちが常にこう存在して……。

ところが、定次が持つ白地屋としての独特な感覚は別の経路から解消され、実際に窯を持つ鬼板屋へと変わることになる。定次の三人の姉たちのうち二人がそれぞれ鬼瓦屋へ嫁いだのであった。(株)大でんちこ鬼瓦に行った神谷等子、さらに、(株)鬼長に嫁いだ浅井頼代たちの関係から窯を持つ鬼板屋と姻戚関係でもって直接つながっていったのである。その上に、定次本人がなんと鬼長の娘である歳子を妻として迎えたことにより、鬼長とは特別の関係が形成されることになった。鬼長は黒の鬼板屋のなかでも伝統のある古株の一つである。その鬼長の今は亡き三代目浅井邦彦(歳子の兄で、頼代の夫)から定次は直に助言と援助を受けることになる。

もう一人の姉(頼代)が鬼長に嫁いでるんで、で、そちらの旦那(浅井邦彦)、ちょっとねえ、まあ、うちの兄さん亡くなっちゃったんですけど、その塗装などもさせてもらったり、いろいろしとって、まあ、そこが昔で言うところと完全にプロの方でしたので、で、まあ、「おい、やりゃいいぞ」と。「まあ、何とかなで大丈夫だ」という話で。「いかにゃあうちは、少しぐらい焼いたやつをうちで取ってやるよ」という感じのなかで、こう、少しずつ始めようかなという感じになって……。

はじめ、それでも自信が無かったものですから、小さい窯で、まあ、それでまた2年ぐらいやったんですけど。で、そこでやってみたら、「うーん、なかなかいいな」と。そんな感じで、じゃあ、大きな窯を入れてもう一個やろうと……。で、やり出した。でも、やっぱりここでもう一個大きい窯がほしいなど。

実際には昭和62年(1987)に小さい窯を一基、平成6年(1994)に中型の窯を一基、そして平成11年(1999)には大型の単窯を一基導入している。平成元年の1989年には定次は屋号を(株)石英にし、石英工業から再度の名称変更をしている。平成11年の大型の単窯の導入により、石英は本格的な黒の完全製品を生産する鬼板屋に発展を遂げている。石英工業として白地の鬼板屋を立ち上げて25年目の出来事であった。

白地から黒地への転換を成し遂げた定次はさらに発想を広げて、「一貫生産ができるようなシステムの構築」を現在(2014)は目指すようになっている。

土からやりたかった。土元^{もと}っていうのはできないですから……。我々には山もないし……。そんな無理なんで……。そういうところでやられた配合粘土をうちが仕入れて、それで、土練機で出して、製造から乾燥、焼成、販売という、そこを一貫でやれたらいいなという……。うん、それは前から思ってたんですけどね。やっぱ、土練機がないと、やっぱり、こう、なんか、片端^{かたわ}じゃねえか、うん……。ていう気持ち^{きもち}が自分のなかにちょっとあったもんですから。

で、たまたま、廃業される土練所をうちが借り受けて、で、そのまま、その土練所をうちが、……生かして使ってたんですけど。たまたま縁があって去年(2013)、「買い取ってくれ」と……。ということで、土地と建物と機械全部、うちが一式、去年の11月に買い取ったんですけど。まあ、それで、ちょっと、本人、苦しんどるんですけどね。

この荒土工場はすでにネクストという会社名で実際に稼働している。定次は荒土に続いて金型も一連のシステムのなかに組み入れている。

本当は、もう一個、金型も全部、その、自分とこで自家製造できたらいいよなと思ったんですけど。それはちょっと断念しまして……。で、鍛冶屋も一軒辞めるところがありましたから、「ほんじゃ、やめるなら……。うちの会社^{はい}入れ」と。で、名前はあなたの存続でやってくれと。……んで、資本もあなた自分でやってて言って……。うちは金型をあなたに出すけど、優先的に、順位で、作ってと言う。……で、

今、うちの、あの、工場一部、あの、貸して、そこで機械も全部……、あの、入れて、そこで、やっておるんですけどね。

定次の考えは次の言葉によく表されている。それは単なる思いではなく、実際に実行に移されて、一つのシステムとして形成されつつあるのである。

「あとは、金型ができて、粘土があって、白地ができて、で、……焼くことができたなら、これはほとんどオールマイティーに近いじゃないか」という、……ということ自分の頭の中で勝手に考えていたんですけどね。

石川智昭

(株) 石英はすでに手作りの鬼板師として四代目が誕生し、石英の仕事場で鬼瓦を製作している。定次の息子、智昭がその人である。智昭は昭和 53 年 (1978) 6 月 14 日に生まれている。智昭に最初に会ったのは実は石英の工場ではなく、カネコ鬼瓦であった。当時、智昭は兼子武雄の二代目、稔みのるのすぐ隣で、主に稔から指導を直接受けながら黙々と仕事をしていた。今回、2013 年 11 月 14 日に石英に来たときは、一階の仕事場と二階が事務室になっている建物のなかで、独立した鬼師として仕事に取り組んでいた。定次は息子の智昭を一人前の鬼板師に育て上げていた。智昭に話を聞いたが、印象は職人肌の寡黙なタイプの人間であった。父、定次とは逆の静かな性格を持つ。その智昭が鬼板師の始まりについて訥々と語ってくれた。

瓦自体も、そう、あまり興味が無かったというか、はじめは。

(鬼瓦を意識し始めたのは) やっぱり、その、修業に出たあたりからじゃないですかね。入るきっかけは、まあ、兼子さんのところに修業に行ったのがきっかけなんですけど。

18、9 ぐらいで。

高校生までは瓦には関心をそれほど持たなかったが、ただ石英の跡取りであることは常に意識していたのである。

まあ、「いつか継ぐのかな」っていうような意識ぐらいしか……。それは、もう、常々ね……。

定次は智昭が小さい頃からいつも家業を継ぐことに関してはしっかりと言い聞かせていたのである。定次は次のように言い添えた。

長男は継いで当たり前という……。そういう風に小さい頃から言ってきたんで。

これは定次だけでなく、母親の歳子も同じであった。しかも、定次も歳子も単に石英を継ぐのではなく、一人前の独立した手作りの鬼板師になることを要求したのであった。二人の心は石英が正統な黒の鬼板屋になることを目指していたのである。歳子は智昭に次のように言っている。(第4図参照)



第4図 石川智昭(左)、かわら美術館2Fにて鬼板師技能検
定試験受験中(2007年9月16日撮影)

絶対に、「手作り鬼瓦の職つけとけば、絶対に安泰だから」って。あの時は、まだ、鬼がよかったからですね。絶対やったら、絶対にいいから。プレスはみんなやれるけれども、手作りは、絶対、修業しないとやれないから。強引に言っちゃったから、ちょっと自分のなかでは何か、葛藤があったみたい。

智昭はこのように両親からの強い勧め、ないし強引な後押しをされて、鬼板師の門を潜るのであった。入った先はカネコ鬼瓦である。選んだのは智昭本人ではなく、父の定次であった。定次はなぜカネコ鬼瓦を鬼瓦の修業の場として智昭に選んだのかを話してくれた。

私が選んだんです。選んだという言い方、失礼なんですけど。あの、やっぱ、大将（兼子武雄）、息子さん（兼子稔）もそうなんですけど、三州では、もうずば抜けて腕がよいということと、それから今の時代のニーズに合っているのかなと。

あの一、私が見させていただいた部分のなかで、鬼屋さんでは、その、「見て盗め」という親方と……。うん、あの、見て盗める時代ではないなと私は判断しているのね。

そういう、今の若い子たちが、見て、盗んで、自分で、その、覚えるなんて言う時代じゃないと。手取り、ほんとに、こう、へらをこうやって持つんだよ。こうやって彫るんだよって、口で言ってくれるそういう親方がいいなって思って。

あの、まあ、ちょっと深谷さんにおられる頃からちょっと知ってたもんですから。見てて、この人なら預けても上手に教えてくれるだろうなと。

カネコ鬼瓦は定次の頼みを最終的には受け入れ、智昭はカネコ鬼瓦で平成9年(1997)、18歳で形式は昔のような小僧としてではなく、(株)石英の出向社員として給料は石英から出るかたちを取った。目的はただ一つ、鬼板師になるために腕を磨くことであった。そして10年をかけてカネコ鬼瓦で修業をし、平成19年に石英に鬼板師として戻ってきている。平成19年12月6日には三州鬼板師技能試験の上級に受かっている。歳子は修業を始めた頃の智昭を次のように言っている。

最初はね、でもね、腫れ物に触るようでね。うん、イライラしてたからね。やっぱし、動かないから、手が。うん、かわいそうだなと思ったけど。乗り越えたら、絶対に……とってね。

智昭は歳子の話を聞きながら、静かに笑いながら話すのであった。

無我夢中でしたね。本当に、優しく、手取り足取りみたいな。教えていただいて、はい。

いつ頃からへらが動くようになったのかと智昭にたずねてみた。

感覚……。どうなんですかね……。感覚……。まっ、よくわかりませんが、なんか、「いつの間にか」って感じで……。

「やれるなー」みたいな。あるとき、何か、「できるじゃないか」って。

えーっと、まあ、踏ん切りが付いたあとじゃないかなって思うんですけど。

定次も歳子も智昭の側で話を聞きながら、定次が助け船を出してきた。

俺が見とったとき、3年から4年に入る頃から、うん、たぶん自信がちょっと持ててきたかなって見えたけどね。

7年目ぐらいからですかね。はい。親父さん（武雄）がね、「もう、智くん、大丈夫だよ」って言って。「まあ、ほかっとても、あとは、ちょっとできたやつを見て、いかんところをちょっと直してあげやー、すむよ」とかって。そういう話は聞いておった。（第5図参照）



第5図 カネコ鬼瓦にて鬼瓦修業中の石川智昭（左手前）と親方の兼子武雄（右手奥）2000年1月18日撮影

石英の手作りの仕事場を持った智昭は現在は日々黙々と注文を受けた鬼瓦を製作している。その智昭は作るときの思いを語ってくれた。

品物が最終的に喜んでもらえたらいいなと……。注文したところから。という考えでやってますね。はい。「すばらしい」とか言ってもらえるといいなという……。

まとめ

(株) 石英の成り立ちについて検討をしてきた。この事をもとに、これまで様々な鬼板屋を調べてきてわかった事実と比較することにより、石英の特徴が浮き上がってくる。石英は少なくとも調べた限りにおいて、他の鬼板屋とはかなり違っている。大きく異なる点は瓦屋から鬼板屋へと転業したことである。これまでの調査研究で見えてきた鬼板屋になるパターンは五つある。まず最も古い形として、バンクモノになり各地を転々としながら鬼板師の修業をする形である。高浜の最も古い鬼板屋はこのバンクモノのなかで経営的才覚を持つものが故郷高浜へ戻ってきて始めたものである。次のパターンは新しく始まった高浜の鬼板屋で小僧として働き、年季を明けて独立し、自ら鬼板屋を始める形である。第三のパターンが鬼板屋に生まれたものが鬼板師となり、跡を継ぐ形である。第四のパターンが鬼板屋に生まれたものが鬼板師はもとからいる職人に任せ、自らは社長となり鬼板屋を経営する形である。第五のパターンがプレスの白地屋に生まれながらも、手作りの鬼瓦に興味を持ち、自ら努力して鬼板師になり、独立して鬼板屋になる形である。

石英の場合は上記にあげた形とは別の新しいパターンを成す。つまり、瓦屋が鬼板屋になる形を取っている。その第1号が石川英雄であり、父、与松によって鬼板屋の鬼源で小僧から始め、年季を明けて鬼板師になっている。しかし英雄が鬼板屋を起こすのは、英雄がなんと63歳、昭和49年石英工業を立ち上げたときのことである。この時始めて



第6図 カネコ鬼瓦にて一石川智昭（左）兼子武雄（中）兼子実（右）2000年1月18日撮影

正式に瓦屋から鬼板屋になったのである。

石英の次の特徴は白地屋から窯を持って鬼瓦を焼き、製品化された鬼瓦を出荷する黒の鬼板屋（黒地）への移行をしたことである。この白地から黒地への移行は単なる窯の導入だけではなかった。鬼板屋になったときの名称が石英工業となっている通り、英雄が鬼板師として手作りの鬼を作っていたとはいえ、主たる製品はプレスによる大量生産の鬼瓦であった。事実、英雄から定次への交代は手作りの鬼板師の存在が欠けていたのである。

その欠落を埋める作業が智昭の鬼板師としての修業であり、その独立であった。これによって文字通り石英は瓦屋から鬼板屋になったといえる。ただ英雄から一世代飛んで智昭に移るとき、鬼板師としての系統が断絶した。鬼源の系列からカネコ鬼瓦へと移ったのだ。カネコ鬼瓦は親方の兼子武雄が鬼板屋の「神仲」出身故に山本吉兵衛の系列に入る。石川福太郎系ということになる。（高原 2003）石英は四世代をかけて、初代石川与松の夢を実現したのである。（第 6 図参照）

参考文献

- 高原隆 2003 「鬼師の世界—黒地：山本吉兵衛系（1）—」『文明 21』第 10 号：163 - 188.
高原隆 2004 「鬼師の世界—黒地：神谷春義・岩月仙太郎系（1）—」『文明 21』第 12 号：113 - 165
高原隆 2012 「鬼師の世界—白地：カネコ鬼瓦—」『愛知大学総合研究所紀要』第 57 号：1 - 21.
荒川盛也編 2013 「だるま窯<上>」『読売新聞 2013 年 2 月 22 日』読売新聞社
荒川盛也編 2013 「だるま窯<下>」『読売新聞 2013 年 3 月 8 日』読売新聞社